



精神科医
瀬戸 睿

もう50年近く精神科医をやっている不思議に思うことがある。それは、外来診察に来られる教員と警察官の多さである。最近、警察官は少なくなっているが、教員は逆に増えてきている。

相談に来られる教員は30〜40代の方が多く、どなたも今にも倒れそうな、疲れ切った表情、態度である。よく話を聞くと、自分の時間がなく、授業と部活、保護者への対応、子供たちの

安全と健康への配慮で目一杯であり、全くゆとりがない。そこへいじめ対策や保護者からのクレーム対応等が重なる、心も体もついていけなくなりダウンして相談に来られる。身も心も擦り切れているのだ。

何故、学校の先生方はこんなに疲れるのだろうかと思つてネットで調べてみた。すると驚くべき先生方の状況が分かった。教員の過労死がこの10年間で63人上

ると毎日新聞の調査で明らかになったのである。文部科学省が2016年度に公立校の教員を対象にした「教員勤務実態調査」では、「過労死ライン」(月80時間以上の時間外労働)を超

える教員が小学校で3割、中学校で6割もいるという事が明らかになった。更にびっくりするのが残業代はゼロであるという。これは、1971年に成立した給特法によるもので、今後成立させようとしている高度プロフェSSIONナル制度や裁量労働制と同じで、定額働かせ放題の法律となっている。そういう教員の必死の頑張りで子供たちは支えられているのである。

この事実、私達は気分くべきであるし、現状を変えようと働きかけなければならぬと思う。教員に休みを与えよう！残業代を出してやろう！と。

「教員の働き方」